

## 序

1985年に李世珍先生の『常用腧穴臨床發揮』（日本語版『中医鍼灸 臨床経穴学』）が出版され、続いて1995年には『鍼灸臨床弁証論治』（日本語版『中医鍼灸 臨床發揮』）が出版され、2006年の今日、先生の嫡男で直系である李伝岐氏の『祖伝鍼灸常用処方』（日本語版『中医鍼灸 鍼灸処方学』）が出版された。20余年の月日を経て出版されたこの3部作には、数多くの内容が込められている。私たちはここに、中国鍼灸学の学術的体系の誕生を迎えることができた。

鍼灸学は、現代科学の理論をもってすると、形にすることが極めて難しい応用学科だといえる。科学的思想とは、物質と実証のうえに成り立つものである。一方、鍼灸学で最も重要視されるものは、玄学概念である「気」であり、鍼灸学の基礎的構造もまた、科学では実証できない経絡学である。気—経絡—経穴という構造は、典型的な東方の「象」の体系であり、中医学は、世界のすべての応用学科のうち、最も大きな「象」の体系だといえるだろう。鍼灸学は、中医学の巨大体系のなかで最大級の支流であり、東方の玄学の特色を有しながら、鍼灸独自の特色も持ち合わせている。

鍼灸学は、中医学と源を同じくする流れを受け継ぎながら、整然とした独自の認識論や操作・治療方法も打ち立てている。近代的な疾患および生命・健康に対する認識を結び付けるというニーズや、学科化・システム化・理論化による学科構築という特徴を踏まえうえて、鍼灸学に厳格かつ科学的な学術体系を構築するということは、中医学の発展にとって、非常に重要な指導的意義と実践的価値をもたらしている。私たちは、李氏親子が出版したこの3部作をひとまず「李氏鍼灸学」と名付けよう。李氏鍼灸学の最大の特徴とは、すなわち理・法・方・穴の一体性・完全性・系統性である。

中医の理・法・方・薬は、完全化された1つの体系である。理と法は中医の立論の基礎であり、方と薬は中医の治療を実現するものである。中国文化には、基礎的かつ重要な理論が極めて象徴的で曖昧であるという、非常に際立った特徴がある。たとえば陰陽は、中国文化で最も基本的かつ核心を成すものであり、すべての事柄を陽性および陰性の象徴的意義により説明することができる。また五行の金・木・水・火・土は、5種類の元素を指しているものではなく、5種類の元素の属性を示すものであり、万物をその特徴にもとづいて分類し、各自の性質や他に与える作用により生まれる関係や、生・克・制・化のプロセスまで形作っている。

陰陽学説は東方の認識論の核心であり、また五行関係はこれを具体的に示したものだといえる。そして中医はまさに、このようにシンボリックで曖昧な陰陽・五行説を基礎として成り立っているのである。同様に、中医の理・法・方・薬は中医の認識論の骨組みとなるものであり、「理」は医理・病理を指すだけでなく、さまざまな理が渾然一体となった、人と関係の深い天理・地理・世理（社会）・時理（五運六気）を含む「天人合一」の大理論を指している。「法」もまた単純

な治則ではなく、中医学の疾患や治療に対する東方的な限界・評価・全体観や、医家の立場・学識・徳・知識・技術なども含まれている。また「方」は、単に薬性・帰経・作用などにより配合された「処方」のことでなく、中医理論の原則にもとづき定められた規則・規範であり、それが適当な分量・度合いおよび合理的な配合として具体化されたものである。さらに「薬」は、中薬店で見かける植物薬を主とした中草薬のみを指すわけではなく、薬用価値を有する植物・鉱石・動物などの物質を指すとともに、治療効果のある技術や方法も含んでいる。

中医は現在、「理」と「薬」に大きな問題が発生している。中医の「理」は、中国の古代哲学の陰陽・五行理論を基礎としており、そこから、経絡・気血・三焦、および解剖学とは異なる中医独自の臓腑系統が派生している。現在、数々の中国文化が失墜の一途を辿っていることにより、陰陽・五行理論も、潜在的には中医との関係を保ってはいるものの、徐々にちぐはぐな関係になりつつある。中医の教育現場では、この点をあまり重要視しておらず、陰陽・五行を排斥・非難することが、一つのスタイルでもあるかのようにになっている。多くの中医師は、経典を捨て去り、伝統的な中医学との関係を断ち切って、「法」や「方」を重んじる人も少なくなっている。「法」が「理」を離れてしまえば、本来「大法」と呼ばれていることも、徐々に取るに足らないことへと変化してしまうかもしれない。特に、西洋医学の科学的理論が強勢を保っているなか、中医の「法」が、中国伝統文化の「理」においてしっかりとその地位を保つことは容易ではなく、西洋医学の「理」を無理やり中医に当てはめざるを得なくなってきた。

中医の「薬」は、長きに渡って現在流通している中草薬に頼り過ぎてしまい、さらに、動物保護や鉱物薬の重金属含有量規制も手伝って、徐々に中医＝草薬医と変化してしまっている。中医の治療が、ますます草薬に頼るようになった現在では、草薬の栽培・加工・流通という不確定要素が拡大し、目に見えない問題がますます多くなり、品質の保証が難しくなっている。このように、中医の手中にある「薬」という利器は、すでにその威力を失いかけている。一方、西洋医学の「薬」は、20世紀以来常に拡大・発展を続け、化学製剤以外にも、各種の手術技術および機器類が完璧に揃ってきている。さらに、飛躍的に発展を続ける現代科学が、西洋医が治療に用いる「薬」の種類を絶えず拡充しているのである。

中医の「理・法・方・薬」のなかの「薬」も、もともとは幾重にも組み合わせられた大きな体系であり、植物薬・鉱物薬・動物薬以外に、鍼灸・食事療法・導引や、道家・儒家・仏家に伝わる有効的な養生法などもすべて、古代中医の「薬」に組み入れられるべき要素なのである。さらに鍼灸は、草薬を除いた中医の「薬」のなかで、最も重要な要素である。いわゆる薬という角度から現在の中医をみると、一般的な方剤や西洋薬を処方できる中医は多いが、煎じ薬以外に丸・散・膏・丹薬を使える中医はすでに多くはなく、経絡を理解し、鍼灸を得意とする中医はますます少なくなっている。「薬」は中医の治療効果を確立するための重要なポイントであり、「薬」の縮小化と把握できない要素の増加は中医学の健全な発展を妨げ、中医の西洋化はまた中医の基礎を音もなく崩壊させるであろう。

中医がこのような異常な発展期を迎え、鍼灸学が瀬戸際に立たされているなか、李氏鍼灸学は、毅然と根気よく中医学思想と鍼灸学理論の創建を続けている。

李氏鍼灸学の第1巻である『常用腧穴臨床發揮』は、伝統的な鍼灸の経典に記載されて

いる、経穴の効能とその応用知識や経験を受け継ぐと同時に、自身の鍼灸治療の経験を踏まえ、経穴の効能を深く研究している。なかでも、「経穴効能の検討と応用」では、同一の経絡で効能が似通った経穴と、異なる経絡で効能が似通った経穴の、おもな特徴と相違点を事細かに列挙し、経穴の分類・分析を理論化している。そして経穴の配穴については、主穴とそれに配穴した経穴の作用や、治療する証について詳しく述べており、経穴の組み合わせによって生まれる作用を、相応する伝統的な中薬方剤の効果に喩えて分類している。これにより、経穴の配穴の作用をイメージ的に認識させ、重要かつ実際に効果のある参照体系を構築している。今日、これらを基礎として発展を遂げた『祖伝鍼灸常用処方』が誕生したのは、まさに必然的であったといえよう。

有効的な参照体系を構築し、それがさまざまな角度から証明されて発展を遂げ、主体的な理論の合理性と安定性が強化されたということは、東方文化の各部分と現代科学の思想構造とを融合させるうえで重要なことである。『常用腧穴臨床發揮』は、伝統的な鍼灸学書籍を基礎として構築されただけでなく、さらに『黄帝内経』『傷寒雑病論』の医学思想を伝承し発揚することにより、その思想や理・法・方・穴という全体的な体系の基礎を固めて発展させており、後世に残る中医学の代表的な学説思想を継承している。

また同書の経穴の応用は、伝統的な経絡学にもとづいているだけでなく、深遠で広大な中医学の思想体系にもとづいたものである。さらに得難く尊いことは、これらが、1万を超える実際の症例から直接得た詳細なカルテを基礎に成り立っているということである。これらの症例は範囲が非常に広く、老若男女を問わず、都市部・農村部・貧困層・富裕層・国内・海外などの症例を含んでおり、各型・各類・各科・各証を網羅している。このように、大量の臨床実践にもとづいた学科は、実証を基に構築するという科学理論の典型的な特徴を体現したものである。

足三里の部分为例にとってみよう。『常用腧穴臨床發揮』に記されている足三里の主治病種・病症は、鍼灸典籍のなかでも最も豊富である。これは、先人の足三里の効能に対する実践的な知識を継承して統括しただけでなく、李氏が経穴の臨床応用のなかで、中医学の弁証論治の理論や、李氏独自の鍼灸処方学に対する思想を結合させて得られたものであり、足三里とその他の経穴との配穴による構造変化、動態変化、作用点、作用力、エネルギーと効果の変化の実証体験なのである。この点は、張仲景が『傷寒論』の主方・柴胡湯剤の8種の変遷過程において、証変・病変・方変・薬変にもとづき思考を進めたことに類似している。経穴の普遍性・特異性・定位性を、経穴の配穴のなかで具体的に示し、またこれと同時に、経穴が陰陽・気血のバランスを調整して疾患を有効的に治療するという作用や、経穴独自の疾患予防・健康維持・体力強化という作用すべてを、最も有効的に表現している。

私たちは、李世珍氏の『常用腧穴臨床發揮』は、氏が先輩方の鍼灸知識や、中医学実践の思考の継承を基礎とし、伝統的な臟腑経絡学と中医学の堅実な理論基礎にもとづき、鍼灸経穴配合の実験および検証を発展・完成させ、鍼灸処方学の雛形を構築したものであると考えている。

李氏鍼灸学の第2巻『鍼灸臨床弁証論治』は、中医学の基礎理論を枠組みとし、経絡・経穴・臟腑・疾病および経穴の配穴を弁証論治の法則に組み入れ、鍼灸学を深く研究している。鍼灸

の治療効果は、まず経穴の効能を理解しそれを運用することで得られ、鍼灸学の基礎理論・治療原則・配穴原則は、中医学そのものにもとづくものである。李氏鍼灸学が提唱している理・法・方・穴のうち、理と法は中医学の基礎理論にもとづいている。また「方」は、中医の病因・病理・病位・病機・病勢・病程に対する理論や、八綱弁証・臟腑弁証・衛氣營血弁証を応用し、経絡と経穴の効能・主治を結合させて、鍼灸学独自の「方」としている。李氏鍼灸学は、中医学の弁証論治の思想を鍼灸学のなかで具体的に表現したものであり、李氏鍼灸学が提唱している理・法・方・穴と、伝統的な中医学の理・法・方・薬は、同源・同体・同功なのである。

『祖伝鍼灸常用処方』の出版は、あたかも中医の「方」が、理・法・薬の各要素を含む治療薬材の配合モデルを完全化したように、李氏鍼灸学をより具体的で完璧なものにしている。中医は、病・証・症の弁別により各種証型を決定し、また薬物の薬性・効能・主治・帰経などの要素を組み合わせて証型と結び付け、これにより方型を構築している。病の証型化と薬の方型化は、治療に規律をもたせて信頼できるものにし、また中医の弁証論治の特色や、中国文化の陰陽・五行・天人合一という特徴も盛り込まれている。李氏鍼灸学は、完璧な中医基礎理論や、中医によってすでに確立されている各種証型にもとづき、鍼灸処方学の構築を完成させたものである。

『祖伝鍼灸常用処方』には、1本の明確な筋道が通っている。李伝岐氏の祖父である李心田氏の著作『鍼薬匯通』は、鍼灸処方学の確固とした枠組みを打ち立てた。伝岐氏の父・李世珍氏の『常用腧穴臨床發揮』では、『鍼薬匯通』を基礎として、鍼灸処方学の内容を充実・拡大させており、中薬の方剤の方義・効能・治証を踏まえ、鍼灸の効用と結合させて鍼灸処方を命名している。李氏鍼灸学は、李心田氏から始まり、李世珍氏の手により発展を遂げ、李伝岐氏がすべての内容を完成させたものである。

李伝岐氏の『祖伝鍼灸常用処方』は、鍼灸学を形成している理論基礎や発展の過程という深い内容を、わかりやすい表現で示しており、鍼灸処方の立て方の規則や、鍼灸治療の各種操作手法などを詳細に述べている。また、中薬方剤の構成・治療作用のメカニズムや、薬材の性質・効能の特徴を細かく分析し、相応する鍼灸処方と、多角的かつ全面的な比較を行っている。このように中薬方剤を深く分析することで、鍼灸処方の成立を傍証しているのである。経穴の効能と配穴時の協同作用については、経穴の異なる効能を基礎に、異なる鍼灸手法で調整を行い、弁証論治の法則を拠りどころにして、処方を立てる際の原則を詳細に論証している。さらに、中薬方剤と比較・参照することで、鍼灸処方の定性・定位・定型を完成させている。

「協同作用」は、鍼灸処方学の要である。西洋薬のメカニズムは作用に重点を置いているが、中薬、特に鍼灸の効能は調和を重んじている。良い中薬または鍼灸の処方構成は、生命の自己調整能力を大いに促進させ、さらにこの能力を、処方の効能が指し示す方向へ向かって、継続的にプラスに働かせることを可能にさせている。『祖伝鍼灸常用処方』のなかの代表的な経穴処方である、「滋陰清火方」を例にとりて協同作用の妙を説明してみよう。

この処方は、手の少陰心経の神門と足の少陰腎経の復溜を組み合わせたものであり、腎水不足・心火亢盛・陰虛火旺・心腎不交などの病証を治療する。この病証には、複雑な証候群が現れ、西洋医学でいう神経症のほとんどの症状が、この証候群に属している。この病証のポイン

トは、心腎不交である。陰陽・五行学説にもとづいて考えると、心は火に属し、火には炎上という性質がある。そして腎は水に属し、水には潤下という性質がある、もし、心の火性と腎の水性が交わらなくなれば、心は身体の上部に位置しており、炎上する火性は炎上して脳府をわずらわせ、七竅不利となり不眠・多夢・頭暈・脳脹・耳鳴り・咽頭の乾き・記憶力や注意力の減退などの症状が現れるようになる。一方、腎は身体の下部に位置しており、潤下という水性が不足すると、遺精・早泄・腰や下肢のだるさ・四肢の冷え・浮腫などの証候が現れる。

心腎不交の証候と、『周易』の「未済」卦と「否」卦は、微妙に呼応している。「未済」卦は、火を代表する「離」で上位に位置し、水を代表する「坎」は下位に位置している。火は本来炎上する性質があるにもかかわらず上位にあり、下に流れる性質がある水はさらに下部にあるため、火はますます上がり、水はさらに下がってしまっ、両者は互いに互いを制御できなくなる。「否」卦は天を代表する「乾」であり上部に位置し、地を代表する「坤」は下部に位置している。天は清気を主り、清気は上昇するが、天は上部に位置している。地は濁気を主り、濁気は下降するが、地は下部に位置している。このため、清気はますます上昇し、濁気はさらに下降して、両者は相通ずることなく、否塞不通の象が形成される。このような理由から、易経を応用する際は、火は下部に水は上部に置いて「既済」とし、天を下に地を上を置いて「泰」卦とする。「既済」とは、ともに交わることに成功するという意味であり、「泰」は安らかに交わるという意味である。つまり、水と火、天と地の位置を調整するだけで、分離・断裂・逆流という状態から、本来の姿を取り戻すのである。

老子の『道德経』には、このような調整に関する最良の解釈がある。老子は、「万物負陰而抱陽、衝氣以為和」といっているが、万物（社会や人の身体を含む）の陽は身体を曲げて陰を背負い、陰は顔を挙げて陽を抱えているものであり、陰陽2つの気は互いを奮い立たせて調和を保ち、このような関係がもたらす結果が「和」なのである。「和」は、中国文化において最大の美であり、最も根本的な善であって、最高の境地と位置付けられている。またこれと同様に、中国医学でも「和」は最高の状態とされており、中医は常にこれを追い求めている。弁証論治の過程においてはまず陰陽を重んじ、治療を行う「方」と「薬」の段階では調和を重んじる。この調和という大原則は、『祖伝鍼灸常用処方』における最も根本的な理念となっているのである。

「滋陰清火方」を振り返ってみると、神門は心経の大穴で火の代表であり、一方復溜は腎経の要穴で水の代表である。2つの経穴の名称は、ちょうど陰陽となっている。また、神門は精神の門戸であり、神は人の清正の気を表しており、清は上昇するもので陽性である。そして復溜の復は重複・多数・覆うという意味であり、溜は水流・流動の意味で陰性である。復溜は、水を主る腎経のなかで、水が最も流動する要の竅なのである。鍼灸は、経穴の選穴および配穴や補瀉の手法の選択と、調和や治療効果の実現が、同じ治療という動態過程において行われるため、薬よりも容易に「調」の効果を得ることができる。神門に瀉法を行うと、火の態勢とエネルギーを下方に伝えることができる。これと同時に、復溜に補法を用いると、水の態勢とエネルギーを上昇させることができる。火が水の下で調い、水が火の上で調うことにより、生命を養う気化作用が生まれると、「既済」という卦象が成立する。このような調整を繰り返し

行うことにより、鍼灸処方の方義と鍼灸師の思いが効を奏し、「否」が去り「泰」が訪れるという、新たな秩序ある生命の状態が徐々に完成していくのである。そして、心腎不交により派生した証候群は、「既済」の状態が成立していく過程で次々と消失していく。このように、経気が整う（＝調）ことによって「和」の状態が得られるのである。

「滋陰清火方」は、中国文化により証明された典型的な例である。このことから、『祖伝鍼灸常用処方』の処方は、陰陽・五行・天人合一という、中国の伝統文化に裏打ちされて形作られたものだということが理解できる。つまり、李氏鍼灸学の3部作に示されている理・法・方・穴という鍼灸学体系は、まさに中国的な思想であり、純粋な中医学の思考なのである。そして『祖伝鍼灸常用処方』で構築されている鍼灸処方の方型・方規・方義は、中国鍼灸学基礎理論の枠組みにおいて、すでに有機的な要素となっている。この新たな要素により、中国鍼灸学は人類の健康サービスにおいて、大きな役割を果たすこととなるであろう。

張仲景生誕 1855 周年に際し、李伝岐氏の『祖伝鍼灸常用処方』が出版されたことは、医聖・張仲景に対する最高の記念に値するものである。この序をもって、医聖の李氏鍼灸学に対する深い敬意を表する。

張兼維

2006年2月 南陽・医聖祠にて